

2019 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	准教授	伊藤 数馬
最終学歴	学 位	専 門 分 野
広島大学大学院教育学研究科博士課程前期修了	教育学修士	体育科教育学、サッカー

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

講義や課外活動等を通して、学生に「真に信頼して事を任せうる人格」が形成できるよう、教育活動を実践する。また学生が主体的な学びを実践できるよう、各分野で努める。授業評価アンケートの結果を踏まえ、事前事後学習ができるよう授業内容の仕組みを工夫する。教育現場で生きる実践力を養う授業内容を展開する。

(計画)

幼児・児童が体を動かすことを好きになる運動指導の実践を研究し、学生に理解させる。学生の主体的な取り組みを引き出すため、アクティブ・ラーニングを導入する。課外活動においては、競技力の向上はもちろん社会から必要とされる資質（礼儀・マナー等）を養成する。

○担当科目（前期・後期）

(前期)

保育内容（身体表現）、体育、体育科教育法、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期)

総合表現技術、保育内容（健康）、専門スポーツ実習（球技）、幼児と身体表現、体育、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

学生の理解を深める工夫として、動画等視聴覚教材を活用し、ディスカッション及びグループワークを取り入れ、双方向型授業を実践した。視聴覚教材の使用は、学生にとって学びやすい方法ではあるが、理解度に差があり、その後の振り返りレポートから考察するに、深く考察できている学生もいれば、表面上の理解にとどまる学生も見られた。ディスカッションやグループワークについても、積極的に活動できる学生が中心となって進行されるため、ここでも個人差がみられた。こういった反省点については次年度改善していきたい。

○作成した教科書・教材

すべての科目において、最新時事情報を盛り込んだ補助資料を作成し活用した。

・白井克尚、今津孝次郎、伊藤龍仁、堀篤実、伊藤数馬、梶浦恭子、新實広記、橋村晴美

『サービス・ラーニング』ハンドブック」第5版、愛知東邦大学教育学部、2019年3月

○自己評価

学生の授業評価における数値はまずまずの結果であった。学生の目線に立って、できるだけ理解がしやすいように例示を多く活用していることが要因ではないか。また授業規律等についても、一方的な指導ではなく、学生とコミュニケーションをとりながら進めるよう心掛けている。実技科目を多く担当しているので、ただ実践して終わりとするのではなく、実践した先に考えや工夫が生まれるような仕組みを今後も継続して考えて取り組んでいきたい。

II 研究活動

○研究課題

- ・児童の体力低下に関する要因分析とその課題解決における実践事例の研究
- ・サッカーにおける指導実践
- ・「表現力」を重視した教材・教授法の研究
- ・地域と連携した人材育成の現状と課題

○目標・計画

(目標)

研究課題をまとめたものを研究成果物として学内外に発表できるよう努める。学生の身体表現能力を伸ばすことについては、保育士・教員養成校であるからこそ、その必修科目を利用して、表現力をより伸ばすことのできる教材・環境は何かについて研究を行う。

(計画)

- ・児童の体力低下に関する調査報告や先行研究を収集、考察する。
- ・大学サッカー部を対象に指導を実践しその成果を検証する。
- ・2016年度より身体表現・音楽表現・造形表現の担当者と共に、実験的調査を行ったので、それらを踏まえ、より実践的な方法を探っていきたい。

○2012年4月から2020年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・今津孝次郎、西崎有多子、白井克尚、中島弘道、新實広記、伊藤龍仁、柿原聖治、伊藤数馬「教員と保育士の養成における『サービス・ラーニング』の実践研究」唯学書房、2019年2月

(学術論文)

- ・伊藤数馬「領域『健康』の指導法に関する一考察 ～保育実践教科書の分析を通して～」東邦学誌 第46巻 第2号 2017、2017年12月
- ・古市久子、矢内叔子、新實広記、伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法Ⅱ—授業実践を通して—」東邦学誌 第45巻 第2号 2016、2016年12月
- ・房野真也、塩川満久、沖原謙、磨井祥夫、上田毅、大塚道太、菅輝、伊藤数馬、川口諒「ボール供給方向の違いがサッカーのインサイドキックに及ぼす影響」運動とスポーツの科学 第21巻 第1号 2015、2015年12月
- ・古市久子、矢内叔子、新實広記、伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法Ⅰ—保育実践教科書を分析する—」東邦学誌 第44巻 第2号 2015、2015年12月
- ・出口達也、上田毅、東川安雄、草間益良夫、斉藤一彦、沖原謙、國木孝治、伊藤数馬、丸山啓史、塩川満久、大塚道太「柔道の「背負投」動作における熟練者と未熟練者の比較」運動とスポーツの科学 第19巻 第1号 2013、2013年12月
- ・古市久子、伊藤数馬「「総合表現」の教育的価値は何か～哲学的視点から考える」東邦学誌 第42巻 第2号 2013、2013年12月
- ・伊藤数馬「児童の体力に関する一考察—基本的動作—」子ども学論集 創刊号、2013年4月

(学会発表)

- ・大塚道太、小柳竜太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、山中亮、土田洋、梶山俊仁、山本英弘「ボール運動のミニ・ゲーム化が運動強度に与える影響について—競技人数の違いに着目して」日本体育学会第70回大会:会場 慶応義塾大学、2019年9月
- ・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、梶山俊仁、山本英弘「ゴール型球技におけるコート

の広さの違いが運動内容に与える影響—サッカーゲーム中のパス頻度に着目して」日本体育学会
第 69 回大会 徳島大学、2018 年 8 月

- ・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬「サッカーグラウンドの広さの違いが運動強度と内容に与える影響—正規グラウンドと面積 1/2 グラウンドの比較検討—」日本運動・スポーツ科学学会 第 25 回大会 広島大学、2018 年 6 月

(特許)

(その他)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

○所属学会

日本体育学会、日本運動とスポーツ科学学会

○自己評価

今年度については、共同研究として学会発表を 1 本することができた。研究成果の発表としては十分とは言えないため、次年度は学内外に研究成果を発表する機会を増やしていきたいと考える。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

大学・学部における校務および委員会の活動を積極的かつ円滑に行う。

(計画)

【全学】・キャリア支援委員会 ・東邦STEP運営委員会

・幼小教育課程委員会 ・保育士養成課程委員会

・教職支援センター運営委員会

・東邦地域スポーツクラブ運営委員会 ・ブランド推進委員会

【課外活動】男子サッカー部 監督

○学内委員等

キャリア支援委員会委員、東邦STEP運営委員会委員、幼小教職委員会委員、教職支援センター運営委員会委員、保育士養成課程委員会委員、東邦地域スポーツクラブ運営委員、ブランド推進委員、男子サッカー部顧問 (監督、強化指定クラブ)

○自己評価

教職支援センター運営委員会委員として、教職に関する方策等を検討し、特に教職合宿の計画立案、運営に主として携わり、介護等体験実習の運営、教員免許更新講習の運営にも取り組んだ。またキャリア支援委員会委員として、学内就職、キャリア教育に関する事項に対し尽力することができた。臨時ではあったがブランド推進委員会委員として、教育学部の今後の施策について検討し発表した。

学部での分掌については、特にスポーツ大会実行委員のサポートや施設等実習副担当をした。

男子サッカー部に関しては、2016 年度より監督として、競技力向上のみならず学生生活の質の向上についても指導を心掛け遂行することができた。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

地域に根ざした大学・学部であるよう社会貢献活動に積極的に参加する。

(計画)

教育学部の教育活動（サービス・ラーニング等）を通じた地域貢献事業や名東区子育て支援ネットワーク関連の事業への参加、サッカーを媒体とした地域貢献活動（少年サッカー大会・少年サッカースクール・近隣幼稚園への指導）を企画・実践する。

○学会活動等

愛知東邦大学地域創造研究所所員

○地域連携・社会貢献等

珉光幼稚園における園児を対象としたボール遊び指導（不定期）

東海学生サッカー連盟 常任委員を担当（競技、登録、会計）

○自己評価

教育学部の教育活動（総合表現技術）として近隣幼稚園園児の観劇招待、男子サッカー部の活動として、少年サッカー大会への企画運営、審判派遣を引率しながら参加することができたが、十分な取り組みとはいえない。次年度はさらに活動の範囲を広げていければと考える。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

東海学生サッカー連盟総務委員（会計・登録）、競技委員（2部）を担当しており、東海地域の大学サッカーの発展に尽力することで自己研鑽したいと考えている。

VI 総括

研究面では、共同研究で学会発表を1本することしかできなかった。今後の課題として、継続している共同研究に加え、教員養成系学部における表現系科目の在り方の検討や課外活動における教育的効果についてなど、研究成果を学内外に発表する機会を増やしていければと考える。

教育面に関しては、昨年度学長表彰をいただくことができたが、今後も学生の視点を忘れず、学生の授業満足度を高め、学習内容の理解を深めることができる授業実践を心掛けていく。また、近年様々な課題を抱えている学生に指導をする機会が増加した。細目に時間を取り面談し、その際は傾聴を心掛け学生指導することで、学生それぞれが各自の課題に取り組むことができ、その支援の一助を担えたのではないかと考えるため今後も継続していきたい。

以 上